

設問番号	3 題中 2 題選択論述の指示文
解答又は 解答例	(1)(2)(3)、3 つの問いから 2 つ選んで答えていること。 どの 2 つを選んだか解答用紙に明記されていること。
出題の意図	自己の知識・理解の得意領域を把握しているかを問うことを意図している。 手続き的な正確さ、枠組みの恣意的変更をしない態度を問うことを意図している。

設問番号	(1)
解答又は 解答例	解答例 申命記 6 章 4-5 節は「聞け（シェマ）、イスラエルよ。私たちの神、主は唯一の主である。心を尽くし、魂を尽くし、力を尽くしてあなたの神、主を愛しなさい」であり、神への愛を主題とし、D 資料に属する。レビ記 19 章 18 節は「復讐してはならない。民の子らに恨みを抱いてはならない。隣人を自分のように愛しなさい。私は主である」であり、隣人への愛を主題とし、H 資料に属する。両者は異なる歴史的・文学的文脈に属し、後代の受容史において統合的枠組みで理解されるようになったものであるが、その統合の必然性はヘブライ語本文中に見出すことができる。ここでは「愛しなさい」と訳されるヴェアーハヴターという動詞形を軸に、動詞「愛する」（アーハヴ）の意味と構造的差異について論じたい。 まず共通点として、どちらも同じ動詞「愛する」（アーハヴ）を、ヴェアーハヴター「そしてそれ故あなたは愛するだろう」という同一の動詞形で持っている点が挙げられる。動詞アーハヴは単なる愛着の感情や意図とは異なり、契約的・相互的な信頼と献身の関係概念であり公的・具体的義務を伴うものである。継続のヴァヴ「そしてそれ故」が、神への愛については「聞くこと」と連動し、隣人愛については復讐や懷怨の禁止と連動することを示しており、単なる感情の発露とは異なる応答的な行為であることが分かる。 相違点として、対象が神と隣人という点がある。これはどちらか一方だけでは愛として不十分であることを教えている。しかしながら、よく言われる「神への垂直方向の愛」と「人間への水平方向の愛」という図式は、愛の対象との位置関係においては妥当であるものの、ともするとどちらも自分を中心に置いて「自分発・相手行き」の矢印で愛をイメージしてしまい、ヘブライ語本文の前置詞の違いを無視することになりかねない。神への愛には前置詞エートが用いられ、対象は特定化されている。一方、隣人への愛にはより広い射程を持つ前置詞レが用いられており、それは「自分が誰を選ぶか」ではなく、「自分の眼前に展開している他者の叫びに自分がどう応答するか」という共同体的な信義・倫理的決断を要求するものである。同じレビ記 19 章 33-34 節において、やはりヴェアーハヴターが前置詞レを伴い寄留者と結びつけられていることも、隣人愛を同胞だけに限定する読みに常に留保を迫り続けている。 シェマの祈りと隣人愛の戒めは、愛についての共通点と相違点を持ちながら緊張関係の中で対峙し、ヘブライ語聖書における愛が 1 対 1 の関係や、閉じた集団内だけに限定され得ないこと、そして人間と神と世界の絶えざる多者間相互作用を促すことを

	教えている。
出題の意図	新約聖書に引用されキリスト教会でもよく知られた神への愛と隣人愛についての 2 章句に関する旧約学的知識と理解を問う設問であり、比較論述の力を問うことを意図している。解答例は一例であり、受験生の設定する比較軸により様々であり得る。採点のポイントは以下の通り。先ず章句自体を知っていることを示すこと（市販聖書の完全引用をする必要はない。レビ記 19 章 18 節の引用範囲は任意）。次に論述にあたり、何を軸に比較論述するかを明示しておくこと。その上で学士課程において得た各章句についての知識や理解が展開されていること。羅列に終わらず、結論が書かれていること。シェマについては、「私たちの神、主は唯一の主」とあり、「唯一の神」と書かれておらず、ヨシヤ期の混交的「主」の乱立状況への批判が背景にあるとも考えられるので、「唯一神信仰の宣言」との記述は必須ではない。

設問番号	(2)
解答又は 解答例	解答例 列王記 17-19 章には、バアル化の進む北イスラエル王国を舞台に、主の預言者エリヤの登場と数々の奇跡物語、カルメル山上でのバアル預言者団との対決、イゼベルからの逃避行、ホレブ山での神との対話などが収められている。 聖書において、バアル神はイスラエルを惑わせ、ヤハウエのみに対する純粋な信仰から迷い出させる「他の神々」の代表格である。被抑圧者の側に立ち奴隷を解放し自由と倫理を与えるヤハウエと、既存体制の維持に奉仕し倫理的逸脱の儀式という偽りの発散を与えるバアルは、互いに相容れない対立関係として描かれている。 エリヤ物語において、嵐と豊穡の神である筈のバアルは、ヤハウエのもたらす干ばつに対して無力であり、火や雨を降らせるのもヤハウエである。カルメル山の戦いはどちらが真の神であるかを徹底的に示すものであった。その後ホレブに逃れたエリヤにヤハウエは対照的な「かすかにささやく声」を通して顕現し、真の神は派手な現象の中ではなく、人間の心に静かに語りかけることを通して歴史を導くものであることを啓示した。 歴史批評的にはエリヤ物語は、列王記全体に及ぶ申命記史家（Dtr）の編集枠組みの中に置かれているが、多くの学者は、もともと独立した匿名の奇跡行者的預言者についての伝説の集成として口頭・文書伝承されていたものが、Dtr によって二次的に編入されたと見なしている。オムリ朝の対外政策とバアル崇拜導入という大枠は、外部史料から裏付けられるが、考古学的証拠は古代イスラエル宗教において複数の神信仰が緩やかに並存していた状況を示しており、エリヤ物語自体は後代の「ヤハウエのみ運動」の神学的反映であると考えられる。 エリヤ物語の歴史批評的考察は、唯一神教の排他性・独善性に再考を促し、考古学的資料と共にバアル宗教の再評価と宗教間共存の可能性にも道を開く。それにもかかわらず、最終形態において聖書が選び取った非妥協的唯一神信仰の物語を、世界に対する倫理と人権の責務として読む可能性を教えている。

出題の意図	旧約聖書の歴史書（ヘブライ語聖書では「前の預言者」）についての歴史的・神学的知識を問うことを意図している。採点のポイントは以下の通り。先ずエリヤ物語（列王記上 17-19 章）の内容について簡単な内容が記されていること。聖書の描く旧約聖書とバアル崇拜について言及されていること。テキストの位置づけと編集層について学部課程で得た知識と理解が展開されていること。古代イスラエルにおけるバアル宗教の受容の実態について聖書外資料からの言及もあればなお望ましい。
-------	--

設問番号	(3)
解答又は 解答例	解答例 まず、日本聖書協会『聖書 協会共同訳』における旧約聖書の 39 巻を目次の順に列記する。それらは創世記、出エジプト記、レビ記、民数記、申命記、ヨシュア記、士師記、ルツ記、サムエル記上、サムエル記下、列王記上、列王記下、歴代誌上、歴代誌下、エズラ記、ネヘミヤ記、エステル記、ヨブ記、詩編、箴言、コヘレトの言葉、雅歌、イザヤ書、エレミヤ書、哀歌、エゼキエル書、ダニエル書、ホセア書、ヨエル書、アモス書、オバデヤ書、ヨナ書、ミカ書、ナホム書、ハバクク書、ゼファニヤ書、ハガイ書、ゼカリヤ書、マラキ書である。以下では、この旧約聖書とヘブライ語聖書(Biblia Hebraica Stuttgartensia)との相違点について論じていく。 構成について、旧約聖書は「モーセ五書（律法）」「歴史書」「詩歌」「預言書」の 4 つに大別され、概ね時間軸に沿って過去・現在・未来を象徴するよう配置されている。一方、ヘブライ語聖書は「トーラー（律法）」「ネヴィーイーム（預言者）」「ケトゥーヴィーム（諸書）」の 3 部から成り、トーラーを中心とした同心円状の構造を持つ。その第 1 部と第 2 部は「神の言葉」あるいは「預言者の解釈の入った神の言葉」として「神から人へ」の方向性を持ち、第 3 部は「人間側から神への応答」という方向性を有すると解される。この構成の違いには、新約聖書と対になってキリスト教の正典の一部をなす旧約聖書の、「イエス・キリストに向かって開かれた性質」と、それ単体でユダヤ教正典の全体をなすヘブライ語聖書の「完結した性質」という、双方の性格の違いが反映されている。 巻数に関して、旧約聖書が 39 巻であるのに対し、ヘブライ語聖書は 24 巻（22 巻説もあり）である。ヘブライ語聖書の巻数が少ない理由は、歴史書の上下巻、十二小預言書、エズラ・ネヘミヤ記をそれぞれ「1 巻」と数えるためである。 書順については、士師記の直後から大きく異なる。前述した構成の違いにより、旧約聖書の歴史書は、ヘブライ語聖書では「前の預言者」と「諸書」に分散している。また諸書の中では「エメト（真理）」として詩編・ヨブ記・箴言が、「メギロート（巻物）」としてユダヤ教の祭で朗読されるルツ記・雅歌・コヘレトの言葉・哀歌・エステル記がそれぞれまとめられている。 以上の相違点は単なる形式面にとどまらず、時間の捉え方（直線的か循環的か）、開放性と自己完結性、あるいは歴史を過去として読むか預言として読むかといった、キリスト教とユダヤ教それぞれの神学的特徴の理解に寄与するものである。さらに、双

	方の特色を楕円の二つの焦点として捉えることで、宗教間の対話と共存の必要性をも示唆している。
出題の意図	旧約聖書とヘブライ語聖書の相違についての形式的理解と、学士課程で得た神学的相違についての知識と理解を問うことを意図している。「協会共同訳の目次の順に」としか書かれていないので、暗記を問うものではなく、他訳に親しんだ受験生もそれによって大量失点することはない。構成については、旧約聖書の 4 部、ヘブライ語聖書の 3 部を明記した上で、新約聖書と対になってキリスト教の正典の一部を為す旧約聖書と、それ単体でユダヤ教の正典の全体を為すヘブライ語聖書の違いを言及することは必須である。巻数については、それぞれの総数と、違いがどこで生じているかについて数例の言及があること。書順については、問題文から、ヘブライ語聖書について書名と書順の暗記力が求められていないことを見抜く必要があり、主要な違いを数点挙げれば十分である。「論じなさい」とあるので形態的な相違点の列挙だけで終わることなく、構造の持つ神学的差異や表裏一体の長所・短所について神学的展開がなされる必要がある。